

# 現代のスピリチュアル志向にわれわれはどう応えるか

鈴木晋 怜

はじめに

現代のスピリチュアル志向にわれわれはどう応えるか

スピリチュアルあるいはスピリチュアリティという言葉は、現代日本人の心性を考える上で重要なキーワードの一つと言ってもよいであろう。正確に言えば、現代日本人の心性というより、欧米先進国に端を発する世界的なキーワードといっても過言ではない。スピリチュアル／スピリチュアリティへの志向性は、現代の大きな潮流として捉えることができるのである。現代を「今、まさにわれわれが生きているこの時代」と考えるなら、この潮流は「今まで生きられていた時代」すなわち最も現代に近い時代＝近代の潮流に変わろうとするものであり、それはある必然性をもって巻き起こってきたと考えなければならぬ。なぜならば前時代の潮流がその勢いを依然として保っているならば、それに乗っついていけばいいわけで、他の流れに乗り移る必要もないし、また他の流れが侵入する隙間もない。その潮流がかつての勢いを喪い、また淀んできたからこそ、そこに新しい流れが巻き起

こつてくるのである。

そこで本稿では、なぜスピリチュアル／スピリチュアリティという新しい潮流が起きてきたのかということについて概観した上で、しかしその本質を見ず、ブーム化されたものに乗せられたときの危険性、さらにはわれわれ僧侶がこの潮流にどのように向き合っていたらいいのかという問題について論じてみたい。

### スピリチュアリティとは何か

この言葉が日本において一般の人々に認知されるようになったのは、二〇〇〇年位からであるが、その担い手となったのは、大きく分けて次の四つの分野であった。

#### ①医療や看護の分野

これは、死に直面する人々への心理的援助という問題意識から要請された。すなわち、そうした人々が感じている心理的苦痛（これを *spiritual pain* Ⅱ 霊的苦痛と表現した）に対して求められる個人の *QOL*（生活の質）を大切にした医療的援助としてのスピリチュアルケアの必要性が問われるようになったのである。従来の身体的・精神的・社会的苦痛を緩和するだけでは充分ではなく、それに加えて、霊的苦痛に対する配慮が求められるようになった。人生の終焉を迎えるにあたって、自分の人生の意味を探索し、納得のいく死を迎え、死を越えた希望を抱くというスピリチュアル・ニードに医療従事者がどのように応えていくかという緩和ケアの実践の場でスピリチュアリティの問題がクローズアップされたのである。

②トランスパーソナル心理学の分野

トランスパーソナル心理学とは、一九六〇年以降におこった心理学の新しい潮流である。これは従来の心理学の主題が「いかにして個を確立していくか」というところにあつたのに対して、人間は個を確立したらそこにとどまるのではなく、必然的に、その個を超えようとする欲求をもち、個を超えたつながりを求めるとする。したがって、従来の心理学が領域外としてきた様々な神秘体験、ドラッグ体験、ヒーリング、シャーマニズムなどにおける至福感や至高体験、すなわちスピリチュアルな領域をも研究の対象とし、さらには、そうした体験は一部の特異な能力をもった者だけが体験できるのではなく、セラピーによって誰でもが体験可能であるとする。

③宗教社会学の分野

この分野におけるスピリチュアリティへの興味は、主にアニメ、インターネット、漫画などいわゆるサブカルチャーの研究の中から浮かび上がってきた。たとえば、子どもから老人まで多くの日本人が魅了された一連の宮崎アニメは、「となりのトトロ」にしても「もののけ姫」にしても「千と千尋の神隠し」にしても、自然に宿る神々や妖精、お化けたちと人間との交流やいのちのつながりを描いている。また、全国各地で開かれている「スピリチュアル・コンベンション」（通称「すびこん」）は、「癒しとスピリチュアルの見本市」と称して、チャネリング・透視カウンセリング・催眠療法・タロット占いあるいは音と香りのリラクゼーション・パワーストーンなど様々なワークショップやグッズが来店されており、二〇〇八年では、全国六十の会場で延べ十万人程が利用している。こうした現象は、従来は、宗教なканなく新宗教のフィールドにおける特定の信者に限定されたものであつたはずであるが、近年では、特に信仰をもたない若者を中心とした多くの日本人が、こうしたスピリチュアルに関

わることに対して興味をもっている、そこに宗教社会学者は関心を寄せるのである。

④ブームとしてのスピリチュアル

これは、たとえば「エハラ現象」に象徴されるように、霊的な能力をもったカリスマに多くの日本人が影響を受け、その世界観に引き込まれている現象をさす。実際、このブームの中心である江原啓之は二〇〇一年以降三十冊以上の著作を出版し、延べ七〇〇万部を売り上げている。

これまでも低年齢層を中心に霊に対する興味は大衆レベルでは根強くあり、いわゆる「霊能者」と呼ばれる人たちも度々、メディアに登場し、注目を集めていた。しかし、従来の霊能者は、低い霊現象を扱い、風変わりな行動をとり、何らかの宗教的背景をもち、現世利益を提供するというものが多かった。それに比べて、現在の霊能者は、スピリチュアル・カウンセラーと称して、高次のスピリットのメッセージを伝達し、成熟した人格を養うことを重視し、宗教的外観をとらず、クライエントに「人生の地図」を提供するという非常に洗練されたものとなっている。

このようにスピリチュアル／スピリチュアリティという言葉は、医療の現場からアカデミックな領域、さらには霊的世界など実に広範な分野で使用され、多くの人々がそれぞれの立場・興味から、これに関わっているのであるが、そうであるが故に、この言葉が本来、何を意味しているのかということの焦点が曖昧となっている。そこで、この言葉の本来の意味について、整理してみよう。

スピリチュアリティ spirituality は、ラテン語の spiritualitas に由来し、本来は「息」「風」を意味する。日本

語では、どのような視点、どのような文脈で用いられるかによって様々に訳されるが、主に次のような訳語がある。

「靈性」：これは鈴木大拙の著書『日本の靈性』のなかで書かれているように、精神と区別する意味で用いる。精神は物質と対抗する二元論的思想で使用されるが、靈性は精神と物質を包括する世界をあらわす言葉として用いる。

「全人格性」：一人の間をまるごと捉えた全体性を意味する。身体的・精神的・社会的＋〇〇的という一領域ではなく、一要素におさまらない、また要素の総和を超えた全体性を意味する。

「実存性」：自らの死に直面し、あらためて切実な問題として立ち現れてくる実存的な問いを意味する。

「大いなる受動性」：何らかの聖なるものに触れ、実存的自覚の極点において、「私が生きている」という主体的・能動的方向が逆転し、「大いなる存在に生かされている」という実感を意味する。

「いのち」：それぞれの個々のいのちは、「大いなるいのち」としてすべてつながっていることを意味する。

この他にも「魂」「精神性」「宗教性」などと訳される場合もある。こうした多様な訳語をもつスピリチュアリテイの意味を伊藤雅之は次のように定義づけている。<sup>(1)</sup>

「おもに個々人の体験に焦点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）と神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすること」

この定義によれば、スピリチュアリティ（あるいはスピリチュアルな体験）には、次のような特徴があると考  
えられる。

①その人自身の個人的体験を重視

宗教の教義・儀礼・組織は必要ではなく、個々人の内的生活や世俗生活の中でも探求され、体験できる。

②超越的な次元にある何ものかにつながる感覚

個別の宗教的崇拜対象（神や仏）にこだわらず、自分を越えた何かとの見えないつながりを身心の全体で感じ  
取る。

③自己が高められていくという実感

気づかれていなかったことへの気づきとそれによる成長や成熟のプロセスと関わる。

さらに安藤治は、人間とスピリチュアリティとの関係を次のように捉えている。<sup>(2)</sup>

「スピリチュアリティとは、人間に本来的に備わった生の意味や目的を求める無意識的欲求やその自覚を言い  
表す言葉である。」

こうした意味づけからもわかるように、スピリチュアリティとは、本来、宗教の核心部分であったことと、ほ  
とんど同じ事柄を含んでいる。たとえば、右記①～③は、空海の原体験と重なるものであるし、「人間に本来的  
に備わった生の意味や目的を求める無意識的欲求やその自覚」としてのスピリチュアリティは、発心や求道心あ

るいは菩提心と読み替えることができる。

しかし、スピリチュアリティを志向する現代人は、宗教を必要としない。Im not religious, but spiritual. という言い回しに象徴されるように、宗教が『聖なる』とみなされるものと関連する教義・儀式・神話・体験・倫理・社会構造などの組織化された形であり、組織としての宗教がどうしても権威主義や排他主義になってしまうとすれば、スピリチュアリティとは、そうした宗教から教義や儀礼、組織、指導者などを順に取り除いていき、最後に残った核であり、スピリチュアルな体験とは、それと自己とが直接つながる体験なのである。

#### スピリチュアリティと現代

なぜ、現代人はスピリチュアリティを求めるのであろうか。言い換えれば、なぜ、現代人はスピリチュアリティへと向かわせるのであろうか。ここで、「真言密教の現代化」という伝法院の発足以来の研究テーマから浮かび上がってきた共通認識について、もう一度確認しておきたい。それは次の四点からなる。

- ① 現代は近代の延長線上にあると位置づけることができる。
- ② その近代的価値観は、今に至ってかなり閉塞化し、行き詰まっている。
- ③ 「現代化」とは「近代の延長としての現代」を批判し、超克（相対化）することによってもたらされる。
- ④ 「真言密教の現代化」とは、真言密教を近代的価値観に拘泥されない視点（普遍化された視点）から解釈しなおし、さらにそのような視点から解釈された真言密教によって「近代の延長としての現代」を打開していくことである。

すなわちここでは、閉塞化し、行き詰まった近代の価値観を超えた価値観によって真言密教を解釈し直すことの必要性が指摘され、それによって近代の延長としての現代を打開することが問われている。そしてこのことは、現伝法院の総合テーマである「伝統の創造——真言密教の実践的展開——」に引き継がれている。

では、ここで指摘されている「閉塞化し、行き詰まった近代の価値観」とは何か。もちろん、何をもちつて近代とするか、あるいはいつからが近代なのかということについては、そう軽々に確定することはできない。また、西欧キリスト教文化圏における近代とイスラム文化圏、さらには日本における近代のあり方を同列に論じることができない。また思想としての近代とそれが現実社会のなかに制度化されるプロセスは、時間的にも意味的にもラグがあり、ひとくちに近代といっても、それを端的に同定することは困難であろう。

しかし、今ここに生きているわれわれが、それに大きく影響され、今なおこの社会の中心としての力を持ち、しかし一方で、その弊害や歪みが生じ、われわれにその限界を感じさせ、それに代わるオルタナティブを希求させるような価値観を作業仮説的に近代の価値観とすることは強ち間違っていないのではないか。逆に言えば、あまりにも時代を複眼的に捉え、ディテールにこだわすぎることは、かえって物事の本質を見損なうことになるのではないかと思うのである。

こうしたことを考慮にいれて、敢えて近代を端的かつ実感的に捉えたとき、岡野守也の次の指摘はいささか単純化されすぎているとは言え、現状認識として妥当なものであろう。

ここ数百年、近代欧米（戦後の日本も含む）の主流をなしてきたものの見方を「近代主義」と呼んでおくと、近代主義にはいくつもの決定的な特徴がある。これを簡略に式にしてみると、近代主義＝人間（それも個人）中

心主義＋合理主義＋物質科学主義＋技術・産業主義＋進歩主義＋現世主義＋無神論と表せるだろう。こうした近代主義の登場にはそうした必然性・妥当性があつて否定しがたいが、しかしその根底に深いニヒリズムが秘められていて、根本的な限界がある。

つまり、究極の霊的／精神的存在としての神を否定し、すべてのものを物質の働きへと還元して捉える物質科学主義は、つきつめると人間自身をも精神ではなく物質の集まり・働きとしてしか捉えられない。そして、人間が「ものにすぎない」とすれば、ものの集合と離散にすぎない生と死に意味（いいかえれば「精神的充足」）を見出すこともできないのは当然である。にもかかわらず人間（自分・個人）は当面はたしかに生きていて、欲求をもっている。とすれば、人生は自分・個人が生きている間に現世的な欲求を満たすことよつて楽しみや幸福を追求する以外には意味がない。いや、意味はないのだが、そうするほかないことになる。そして、もちろん自分が死ねば、すべては終わりで、意味などないことになる。

そういうわけで、近代主義（とりわけその物質科学主義と個人主義と無神論のセット）は底にニヒリズムを秘めており、ニヒリズムは徹底しなければ、かならず一種の個人的な快樂主義にならざるをえない。それは、より徹底するとエゴイズムになる。そしてさらに意味がないという自覚を徹底すれば、絶望や自殺に到るだろう。<sup>(3)</sup>

彼が指摘するように、近代主義は人から生と死の意味を奪い、個人的な快樂主義へと向かわせ、その閉じたエゴイズムは他者とつながることなく、やがて人を絶望へと導くのである。今、多くの現代人が感じている閉塞感、行き詰まり感は、これまで近代主義の圧倒的な力の前に萎縮し抑圧されていたわれわれの根源的な欲求が、

再び疼き始めたことによってもたらされたのではないだろうか。そして根源的欲求とは、生と死の意味を希求する欲求であり、個が個として完結するのではなく、他者とあるいは個を超えた大きな存在とつながってほしいという欲求である。

現代人がスピリチュアリティを求める理由もこの根源的な欲求に導かれているのである。しかし、この根源的な欲求は、深い自己洞察なしに、それがブームとして安易に大衆社会のなかに蔓延っていくと、結局は偏狭なエゴイズムへと回帰してしまう。あたかも自分は個を超え、大きなものとながっていると思いながら、あるいはそうした世界を志向しながら、実は極めて排他的で閉鎖的な世界に自己を囲い込んでいってしまうのである。

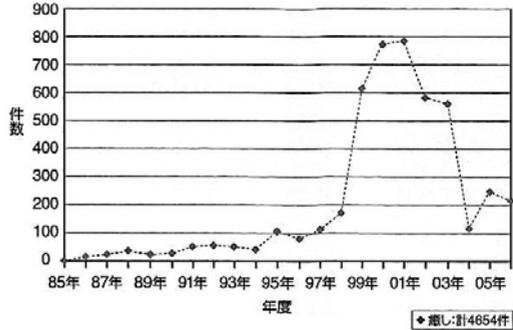
#### スピリチュアルブームに潜む危険性

冒頭にも述べたように、スピリチュアル／スピリチュアリティという言葉が日本において一般に認知されるようになったのは二〇〇〇年くらいからであるが、それは「癒し」ブームの延長として捉えることができる。「癒し」という言葉がマスコミに登場しだすのは一九九五年からであるが、その後急速に増え、二〇〇一年頃にブームのピークを迎える。以降、癒し自体のブームは収束していき、それを引き継ぐようにスピリチュアル／スピリチュアリティという言葉が広まっていくのである。<sup>4)</sup>

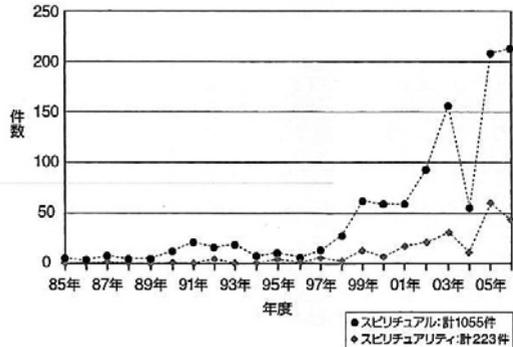
現代のスピリチュアル志向にわれわれはどう応えるか

「癒し」は英語で言うところの「healing」に相当するが、この言葉は、「健康 (health)」「健全な (hale)」「神聖な (holy)」という語と関連をもち、したがって「癒し」には、①肉体的・精神的・社会的な健康を取り戻すこと、②神聖さを有すること、がその意味として含まれることが窺える。また、この言葉は、ギリシャ語で「全体」を意味する「holos」を語源とすることから、「全体性を回復する」という志向性ももつと言える。「癒し」と似た言葉に「治し」があり、日本語としてはこちらの方が一般的に使われていたが、「治し」が、障害のある部分・足りない部分だけの質的・量的な回復・回復といった意味が強いのに対して、「癒し」とはある部分のみ

「癒し」の活字メディア登場数の推移  
《癒し》



「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の  
活字メディア登場数の推移  
《スピリチュアル・スピリチュアリティ》



の治癒ということではなく、それを通して肉体も精神も含めた、より全体的な回復・回復という意味合いがある。さらには、「治し」の場合は、そこに「神聖さ」を求める必要はなく、ただ物理的に治癒すればよいが、「癒し」の場合は、そこに何らかの「神聖さ」宗教的なるもの」が関与することになる。すなわち「癒し」とは、「聖なるものに触れること」によって、欠落したあるいは傷ついた自分を治し、全体性を回復すること」と定義できよう。さて、「癒し」という言葉が人口に膾炙したのは一九九五年からであると述べたが、それ以前に心理療法や代替医学の分野ではすでにこの言葉は頻繁に使われていた。たとえば、NPO法人日本ホリスティック医学協会のホームページには、ホリスティック医学の定義として次のように記されている。<sup>(5)</sup>

1. ホリスティック（全的）な健康観に立脚する

人間を「体・心・気・霊性」等の有機的統合体ととらえ、社会・自然・宇宙との調和にもとづく包括的、全体的な健康観に立脚する。

2. 自然治癒力を癒しの原点におく

生命が本来、自らのものとしてもっている「自然治癒力」を癒しの原点におき、この自然治癒力を高め、増強することを治療の基本とする。

3. 患者が自ら癒し、治療者は援助する

病気を癒す中心は患者であり、治療者はあくまでも援助者である。治療よりも養生、他者療法よりも自己療法が基本であり、ライフスタイルを改善して患者自身が「自ら癒す」姿勢が治療の基本となる。

4. 様々な治療法を選択・統合し、最も適切な治療を行う

西洋医学の利点を生かしながら中国医学やインド医学など各国の伝統医学、心理療法、自然療法、栄養療法、手技療法、運動療法、などの各種代替療法を総合的、体系的に選択・統合し、最も適切な治療を行う。

5. 病の深い意味に気づき自己実現をめざす

病気や障害、老い、死といったものを単に否定的にとらえるのではなく、むしろその深い意味に気づき、生と死のプロセスの中で、より深い充足感のある自己実現をたえずめざしていく。

この定義によれば、「癒し」をもたらずのは、自分に本来具わっている「自然治癒力」であり、この自分が潜在的にもっている「癒し」の力に気づき、それを解放することによって、病める自分のあり方を超越していくことが「癒し」の本質である。

しかし、そうした心理療法や代替医学の分野でもともと使われていた「癒し」の概念と一九九五年以降のブームとしての「癒し」とは、そのあり様が全く異なっている。「癒し」ブームのなかで人びとが求めたのは、様々なヒーリンググッズやヒーリング音楽などの「商品」あるいはエステやマッサージなどの「商品化されたサービス」による癒しと、もう一つは、「特別な他者」の断定的な言説への盲目的な追従である。これらは心理療法や代替医学がめざしていた「癒し」すなわちより深い自己実現や自己のもつ自然治癒力の活性化とは異なり、単なる一時的な安らぎであり、自己治癒力の放棄である。したがって、本当に癒されることはなく、次から次へと果てのない癒しの旅に彷徨うことになる。

そしてこのブームとしての「癒し」のあり様は、そのままスピリチュアルブームに移行していく。スピリチュアル／スピリチュアリティとは、本来は前述のように生と死の意味を希求する欲求であり、個が個として完結す

るのではなく、他者とあるいは個を超えた大きな存在とつながっていたいという人間の根源的な欲求に根ざすものである。ところがブームとしてのそれは、癒しブームに靈的なフレーバーをつけ、あたかもそれが自分の深い内面に入っていくかのように錯覚している現象に他ならない。

たとえば、前述したスピリチュアルブームの中心的存在である江原啓之がやっていることは実質的には日本に古くからあつた靈信仰に乗じた靈媒師の実践と同様である。しかし、彼は自分のことを靈媒師や靈能者とは言わず、スピリチュアル・カウンセラーと称し、また、従来の靈媒師・靈能者が靈障や靈の祟りなど程度の低い靈現象をいかがわしい宗教的手法によって排除するということを売りにしていたのに対し、彼は次元の高いスピリッツトのメッセージを伝達し、クライエントがより豊かな人生を送り、成熟した人格を養うことができるように助言をする。靈信仰を核としながら、それと心理療法的なテクニクを混合させることによって、靈の負のイメージを払拭し、洗練されたものにしていくのである。クライエントと呼ばれる彼の信奉者たちは、彼の言説に励まされ、勇気づけられ、彼が提供するスピリチュアルグッズや音楽やスピリチュアルな聖地への旅ガイドなどを求めていく。これは前述した「商品化されたサービース」と、「特別な他者」の断定的な言説への盲目的な追従という「癒し」ブームの構造と何ら異なることはない。

さて、こうした「癒し」ブームやその延長としての「スピリチュアル」ブームには、大きな危険性が潜んでいる。繰り返しになるが、本来の「癒し」とは自分に本来具わっている「自然治癒力」すなわち「癒し」の力に気づき、それを解放することによって、病める自分のあり方を超越していくことである。また、スピリチュアリテイとは、前述の安藤の定義にしたがえば、人間に本来的に備わった生の意味や目的を求める無意識的欲求やその自覚を言い表す言葉である。両者とも、みずからが潜在的にもつ内的な力に根ざしており、それを根源としなが

ら、その到達点においては自己を超越し、大きな存在とつながっているという感覚を体験することによって、その目的が達成される。

しかし、ブームとしての「癒し」や「スピリチュアリティ」は外的なサービスや他者の力に頼って、すなわち外部の力によって自分を超えようとする。(あるいは超えたような気になる。)そこには自己洞察も内省もなく、外部の力に盲目的に追随し、それに支配されていくという危うさがある。かつてオウム真理教の信者のように、圧倒的なパワーをもつ教祖にしたがい、目に見えない大きな力に触れ、自分が変わっていく(実は変えられていく)というあり方は、その舵取りを間違えると大きな迷妄や凶暴性が生じてくるのである。

また、自己に内在する個を超えていこうという欲求は、個が確立されてはじめて生じるものであって、それがないまま安易にスピリチュアリティに触れようとするとは逆に閉じられた頑なな殻をつくってしまうことにもなる。すなわち、人は外面ではなく、内面こそが大事であり、その内面の最も深い所にあるスピリチュアリティに触れあうことのみが自己を超えて大きなものにつながる手立てだという志向性は、人から社会性を奪い、現実社会における人間関係やコミュニケーションを成立させなくしてしまう。実際に面と向かってコミュニケーションをとりながら人間関係を築いていくのではなく、ネット恋愛やブログのように、顔の見えないまま、あたかもそれこそが一切の外面を排した純粋にスピリチュアルな部分でのつながりであるかのように、コンピュータの向こうの相手との関係にのめり込んでいく自己のあり様は、見えないつながりや宇宙との一体感を求めながら、実は非常に閉じた世界のなかでのエゴイズムに人を落とし込んでしまう。近代主義の行き詰まり、閉塞感からの解放を求めて、スピリチュアリティを志向した現代人は、結果としてまたそのパラダイムのなかに落とし込まれてしまうのである。

今、われわれに求められること

近代主義を超えようと試みながら、実はそこから抜け出せないという不幸な現象をもたらしている責任の一端は、われわれ宗教に関わるものあるいは宗団に確実にある。なぜならば、現代人がみずからの根源的な欲求として求めているスピリチュアリティとは、前述のように宗教の核心であり、すぐれた宗教者の原体験であるにもかかわらず、その現代人の欲求にわれわれが応えられていないからである。われわれがそのニーズに応えられていないから、彼らは皮相なスピリチュアルブームに踊らされてしまうのだ。

スピリチュアリティとは生と死の意味を問うなかで求められるものと述べたが、死と生の問題あるいは死者に對して生者がどのように関わっていくべきかという問題は、あたかも死を隠し生のみを謳歌する現代人の潜在的な不安と危うさ象徴するかのごとく、現代人の大きな関心事となっている。しかし、そうした関心がありながら、ほとんどの人びとは、この死をとりまく問題の解答の糸口を、既成の宗教や宗教者には求めない。むしろ、それらに拒否反応すら示し、その権威や伝統や形式を取りのぞいた後に残る純粹にスピリチュアルな領域、あるいは死（者）と生（者）のつながりそのものに関心を寄せている。

こうした現象がある中で、われわれ僧侶は依然として、通夜・葬儀および葬後儀礼を活動の中心においている。そのこと自体は、決して悪いことではないが、問題は、死あるいは死者にかかわる儀礼を司りながら、われわれがどのような死生観をもってそれに臨んでいるかということ自身にさほど深刻に問うていないことである。現代人が、既成の宗教や宗教者に拒否反応を示すのも、われわれのこの嘘くささを見抜いているからだ。また、靈魂観についても同様である。アカデミックな領域でのスピリチュアリティ研究は必ずしも靈魂ということを前面

には出さず、むしろ排除する傾向にあるが、われわれの活動からそれを排除することはできない。われわれは毎日、勤行や法要のなかで霊を唱えているし、その存在を前提としなければ成り立たない法要や行事を当たり前のように行っている。しかし、霊魂について問われると、急に釈尊を引き合いに出して、「本来の仏教では霊の存在を問うてはいけない」などとごまかしてしまう。

われわれは、たとえそれがブームとして矮小化されていたとしても、安易にそれを見下し、批判するのではなく、まず、みずからの死生観・靈魂観を問い直すことから始めなければならない。

また、われわれの行っている行法・観法を単なる法流の相承や伝統の形式的な継承として修するのではなく、本来の目的を達成するための技法として確立していかなければならない。心理療法的に言えば、臨床的效果を伴ったセラピーとしての行法・観法を重視する必要があるのではないかと思うのである。スピリチュアリティの担い手の一つであるトランスパーソナル心理学では、超意識の体験や個人性を超えた発達は、適切なセラピー・修行の技法によって促進でき、また一部の特殊な能力を持った人だけでなく、誰でもが可能であると考えており、実際その効果が検証されてきている。今後、心理学的な技法とわれわれの伝統的な行法を連動させていくということも考えなければならぬのではないだろうか。

さらに、檀家だけではなく、個人を対象にした行事・儀礼を構築していくことも必要である。今後、家族や地域とのつながりをもたない、しかし、スピリチュアルな志向をもつ現代人が増えてくると予想される。われわれが、そうした人たちを取り込むことができれば、義務や慣習ではなく、自発的に寺に集う人を確保できるようになる。われわれ伝統教団には、長い歴史のなかで生き残ってきたスピリチュアルな場としての寺空間がある。つながっているという感覚、何ものかに見守られ、ケアされているという実感をもてるような場としての寺空間を、

それを欲している現代人に提供していく、それによってわれわれのもつスピリチュアルな潜在力が解放されていくことになる。もともと寺とはそういう空間であり、そこで修行する僧侶は極めてスピリチュアルな存在だ。たはずである。その意味においては、われわれこそが現代の新しい潮流の担い手にならないのである。

註

- (1) 『現代社会とスピリチュアリティ』 伊藤雅之著 溪水社
- (2) 『スピリチュアリティの心理学』 安藤治・湯浅泰雄編 せらぎ出版
- (3) 『イマージュ』 一九九三 vol.47 トランスパーソナルの可能性 岡野守也 三十九頁
- (4) 『霊と金 ―スピリチュアル・ビジネスの構造―』 櫻井義秀著 新潮新書 二〇三頁 より転載
- (5) NPO法人日本ホリスティック医学協会のホームページ  
<http://www.holistic-medicine.or.jp/>

〈キーワード〉 現代 スピリチュアリティ 癒し